
わらしべ冒険者様

行天店

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わらしべ冒険者様

【Nコード】

N40140

【作者名】

行天店

【あらすじ】

冒険者タビキが行く先々で色々な人々の問題や事件に巻き込まれながらも、少しずつ世界を動かしていくそんなお話。わらしべ長者のファンタジー世界版。

もちもの1：安物の剣（前書き）

現在の持ち物

・安物の剣

もちもの1：安物の剣

浅緑の草の芽も春風にやわらかく撫でられたおかげか色の濃い草へと変わり始め、日差しも暖かに降り注ぐようになった春の昼間。

ただひたすら広がる草の原と緑の木に、一本曲がり曲がる砂利道の街道が引かれている風景。

その街道沿いにポツリと生えた背が高く幅の広い老木の木陰に、男が一人横になっている。

男の身なりは、薄汚れ埃被った薄めの外套に、泥やシミが目立ついかにも安そうな布で出来た服。靴も木靴でなく小動物の皮をあり合わせて縫ったようなものだった。

この男が商人ならばせめて服はもう少し身なりのいい服だろう。この男がどこかの町の市民だとしたら、こんなところで寝てはいない。もしこの男が貴族ならば、この世界はよほど酷く衰退しているはずだ。

ならばこの男は何者なのか。

答えは簡単である。

この天気の良い昼間から人ひとりいない野原で寝転がっているようなものは、あてもなく各地を転々と流浪する「冒険者」なのだ。

この冒険者、名前はタビキ。

まだ目の下や口の端に皺ひとつない若者である。

「……………ZZZZZ」

まだ昼間とはいえ獰猛な獣やモンスターに襲われる可能性もあるというのに、年齢に似合わず胆の据わった者であるのか、ただ単に無頓着なのかはまだ知らぬところである。

「……………んっ」

深い眠りだと思ったが、タビキはむくりとすぐに起き上がった。

「何の音だ？」

別に怖い夢を見たとかではなく、タビキは地面から伝わった振動と音に反応して目を覚ましたのだ。一応冒険者として板についているということだ。

タビキは再び耳を地面につけて確認する。

（馬の足音……複数か？ こちらに向かってくる？）

タビキはダルそうに体を起こしつつ、背伸びついでに音の方向に目を細めた。

しばらく見ていると黒い点が見えるようになり、もう少しするとそれが土煙りをあげて爆走する馬車であることが分かった。

駅馬車が急ぎで走らせているなら分かるが、視界に見える馬車の装飾は遠目からでも煌びやかなものだと分かるほどだったので、身分の高い者が財布の紐が長い者が乗っていることは明らかだった。

様子のおかしい馬車を見ているとそのすぐ後ろに小さい黒いものが何個も見えた。

「野盗か？……………んっ、いやゴブリンか！」

馬車を追いかけてまわす黒い影は人型モンスターの中でも最も小さい部類に入るゴブリン種だった。

ゴブリン種は単体ではさほど脅威ではないが、中には人の言葉を理解し会話できるほど知能が高い者もいるため、集団で襲われると腕の立つ冒険者や騎士兵士でも十分な脅威となるモンスターだ。

そして馬車の速さについていくほどの機動力を持っているのでタ

ビキはゴブリン・シーフの集団であることが分かった。

視界に入ったゴブリン・シーフの集団が馬車に追いつき、襲い始めたのを見た瞬間、タビキは馬車の方へと走りだした。

「きゃあああ！」

馬車が今まで以上に大きく揺れ、中にいた身なりの良い女は悲鳴をあげた。

家から遠出してその帰り、順調に馬車が帰路について車輪を転がす途中にモンスターの群れに襲われたのだった。

御者が何かを大声で叫び、慌てふためいていた様子を彼女は思い出す。

馬車の中から聞こえるのは、御者の叫び声、鞭を打つ音と打たれて鳴く馬の声、車輪が地面を蹴って馬車が軋む音、そして金切り声にも近いモンスターたちの鳴き声だった。

「う、うわああああ！」

御者の悲鳴を彼女は聞いた。

彼女は体を震わせ、腕で肩を抱いて縮こまることしかできない。すると急に馬車は止まり、静かになった。

馬の鳴き声も、御者の悲鳴も、モンスターの声も聞こえない。

（な、なに？ どうしたっていうの！？ ……………もしかして終わった？ 逃げ切ったの？）

彼女は困惑した。

でももしかしたら自分は助かったのではないかと期待した。

しかし、それは裏切られる。

不意に体が一瞬椅子から離れ、そのまま馬車の扉が自分の上になるのを彼女は見た。

「きゃああああ！」

体を強くぶつけて彼女はむせた。

そして彼女は理解した馬車を倒されたのだ。

これで地面に面する方の扉からは出られなくなり、馬車から出るには彼女の頭の上にある扉の一つだけになった。

そしてすぐにその扉は開かれた。

そこには彼女を覗くいくつもの赤い目があった。

「ひっいいい」

彼女は小さく悲鳴をあげ、喉を詰まらせてしまう。

ゴブリン達は見開かれた赤い目で彼女を舐めまわすように見る。

「ニンゲンダ。ニンゲン ノ オンナ ダ！」

「ニク ガ ツイテテ ウマソウ ダ！ ハヤク クオウ！」

「マテ！ ソノマエ ニ オカソウ！」

「ソウダ！ ソウシヨウ！」

「サンセイ サンセイ！」

ゴブリン達はそう言って雄叫びをあげて彼女を強引に掴み車外へ

と連れ出した。

「い、いやああ！ いやああ！」

彼女は必死に抵抗するが、小さいが体つきは強靱な体をしている
ゴ布林達になう筈がない。

ゴ布林達はそれが食欲なのか性欲なのかは個々違うのだろうが、
皆邪悪に笑い涎を垂らしている。

そしてゴ布林達は彼女を囲むようにした。

（いやあ。やだ！ やだよ！ だれか、誰か助けてっ！！）

そう強く願い彼女は目を瞑り、口を引き締めた。

しかし、ゴ布林達は襲ってこない。

「ギャアアアア！」

かわりに聞こえて来たのは断末魔だった。

「ナンダ コイツ ワ！」
「ギャアアアス！」

ゴブリン達は乱入者のことに気づいた頃にはすでにその者は二匹目を切り捨てていた。

その乱入者はタビキだった。

「はああああ!!」

タビキは気合を入れて踏み込み、間髪入れずに剣を振り下ろす。

ゴブリン達は下半身を露出している気の早い者から隙を突かれて切り捨てられ、得意とする集団戦術を組む前にタビキに切り捨てられていった。

タビキが五匹目を切り捨てた頃にはすでに逃げ出している者も出始めゴブリン達はすでに逃げの一手となっていた。

「ゴグオオギヤア!」

そして逃げるゴブリン達を軽く追い打ちをしてタビキは構えを解いた。

「ふう、なんとかなったな……」

そう思い剣を納めようとしてタビキは気付いた。

「あ、……剣、折れた。………はあやっぱり安物は駄目だな」

少し気を落としてつつ鞘に剣をしまい、次の剣を買うための金勘定を巡らせながらタビキは女の元へ歩み寄った。

「大丈夫か?」

「……あ、ありが、ひっ!」

茫然としていた彼女はタビキと目を合わすと、体を強張らせて短い悲鳴をあげる。

タビキは一瞬不思議に思い、すぐに原因が分かった。

タビキの身なりは冒険者もしくはよく知らないものが見たなら追いつきか何かと間違うようなほど薄汚れている。

追いつきは勿論のこと、冒険者にしても定住せず商売もせず各地を転々としているような責任も家庭も持たない者は大抵どの村でも町でも問題を起こす。

一般的に追いつきも冒険者も危険視される存在だ。

なので彼女がタビキを見て安心できないのは納得できる当然の反応である。

タビキはそんな様子の彼女を見て苦笑いしながら言う。

「別にゴブリン達の代わりに取って食おうなんて考えてないよ。安心しろ」

そう言うってタビキは手を差し出した。

彼女は他に頼るものもないので、恐る恐るその手を取った。

「怪我は？ 歩けるか？」

「……はい。大丈夫、です」

「ん、さてまずはこいつを埋めてやらないとな」

「えっ？」

タビキに言われて彼女が目やる。

そこにはゴブリン達に殴り刺し殺された御者の無残な亡骸だった。

「キヤアアアア！」

「騒ぐな」

「っ！」

彼女が取り乱したのをタビキは低い恫喝で黙らせた。

「あんたをエサに差し出すこともしないで、最後まであいつらに抗った勇敢な男だ。静かに眠らせてやれ」

「……………」

タビキにそう言われて、喋ることも御者の死体を見ることができずに彼女はそこから数歩後ずさった。

タビキは壊れた馬車の装飾を取り外して、それで穴を掘り始めた。

真上にあった日が傾きかけた頃、タビキは穴を掘り終えて御者を埋葬した。

そして女にとってこれまでの人生で一番壮絶だったのだろう。彼女は壊れた馬車を背もたれに膝を抱えてうずくまっていた。

「終わったぞ」

「あ、はい。すみません手伝いもしないで……………」

「まあ仕方ないさ。こんなこと初めてなんだろう？」

「……………」

女はろくに返事もできないぐらいすでに憔悴し切っていた。

「とりあえず立て。そして歩け」

「え？」

「暗くなる前にできるだけ町に近づかないとな。じゃないとまた襲われるぞ」

タビキがそう言つと彼女は顔を蒼白にしてヨロヨロと立ちあがつた。

「あんたの家は？」

「えつと、ここから馬車で半日ほど行つたところに……」
「そうか。まあ歩きだと一日ぐらいか」

タビキはそう言つて街道を歩き始めた。

女もタビキの後を追うように付かず離れずで歩き始めた。

道中は二人ともろくに会話もせずただただ歩いた。

タビキは砂利道を歩きなれない女に合わせて歩いていたが、彼女にとつてはそれでもタビキは速いと思った。

運良く馬車でも通らないかと淡い期待を持っていたが、見事に馬一頭横切らなかつた。

「今日はここで野宿だ」

女の体力も考えて暗くなる前に休むことにした。

タビキは旅に慣れ、野宿は毎日の日課のようなもので屁でもないが、彼女はどこかソワソワと落ち着かなく、目も泳ぎ続けてい

た。

「俺が火の番をするから、あんたは寝るといいよ」

「あ、はい」

そう女は答えたが、辺りを見回し寝やすいところをキョロキョロと探し、少し横になつては起き上がり場所を移すことを繰り返した。それを見兼ねたタビキは自分の外套を脱ぎ彼女に渡す。

「ほら、これを下に敷くなりしなよ。臭いは我慢してくれ」

「は、はい。ありがとうございます、ます」

女は恥ずかしそうに顔を伏せて、大人しく外套を受け取りその上に横になった。

その頃には辺りはすでに暗くなり、タビキが熾した焚き火だけが頼りとなる。

「あ、あの」

「ん？ どうした？」

女はおもむろに口を開いた。

「今日は、その、ありがとうございます」

「……どうしたんだ急に？」

「いえ、ちゃんとお礼を言っていなかったなと思って」

そう言つて彼女は自分で言っておいて、横になつたままの体勢に気づいて体を起こそうとする。

「あ、別にいいって起きなくても、別に俺はどっかの偉い貴族様や

王様じゃないんだ。気にするな」

しかし、タビキはそれを制した。
女も慣れない野道を歩いたせいだ、タビキの言葉に甘えた。

「あの、えつと……」

「なんだ？」

「いえ、その、お名前を……」

「あ、ああそういえば言ってなかったか？ 俺はタビキだ」

「私はクリスティヌ」バライユです。タビキ様今日は命を救ってくださって本当にありがとうございます」

クリスティヌと名乗った彼女は寝ながらだが、言葉の端を丁寧に述べた。

タビキは軽く笑いながら答える。

「様は付けないでくれ。くすぐったくてしょうがない。それにお礼はもういいよ」

「えつと、ではタビキさんでよろしいでしょうか？」

「ああ、それでいいよ」

タビキは本当はさん付けもあまりされたくないがと思いつつ、クリスティヌの生きてきた世界を考えてそういうものなのだろうと勝手に納得した。

クリスティヌは少し元気を取り戻したのか、よく口を動かす始めた。

「タビキさんはどうして私を助けてくれたのですか？」

タビキはクリスティヌの質問に目を点にした。

「いや、クリスティーヌさんそれは」

「私のことはクリスとお呼びください」

クリスティーヌの横槍で途中で口を閉ざされたが、あまり気にせず続けることにタビキはした。

「わかった。じゃあクリス。さっきの答えだが、俺があんたを助けた理由なんて無いよ。目の前でモンスターに襲われている馬車がいだから助けた。ただそれだけだ」

「でも普通あなたの様な方々は、その……あまり、友好的ではないと聞いていましたので」

控え目にそう尋ねるクリスティーヌの言わんとすることはタビキにも理解できた。

「クリス……何気に失礼なこと言ってるのに気づいてるか？」

「すつ、すみません」

「いや、まあ言いたいことは分かるからいいけどな」

そう言つてタビキは焚き火が消えない様に枯れ枝をくべる。

乾いた音を立てて燃えていくさまを見て、二人の間に静けさが訪れる。

「まあそうだな。クリス、親は？」

「え、はい母と父がいますけど」

タビキの唐突な質問に一瞬戸惑ったが、クリスティーヌは正直に答えた。

「親のことは好きかい？」

「はい。母様も父様もどちらも尊敬できる方です」

「そうか。クリスが良いとこのお嬢様なんだろう？　そういう奴らが集まって踊る……えっと、なんていうんだったかな」

「舞踏会のことですか？」

「ああそう、それだ。そういうのに行ったりするか？」

「ええ、まあ大抵はお誘いいただいて行くのですが……」

そこまで言ってタビキは一呼吸置く。

クリスティー又はまだタビキが何を言わんとしているのかは分からないでいる。

「例えば、そういう集まりの中であなたの両親のように好きだったり尊敬できる人はいるか？」

「ええ。皆さん品のある方々で、心根の良い方たちで　「ちがうだろ」」

タビキはクリスティー又が言い終わる前に、言わんとしていたことを否定した。

そして茫然とする彼女を余所にタビキは続ける。

「確かにクリスの言うとおり性格のいい奴が多いのかもしれない。でもそれだけじゃないだろう？」

「……………」

クリスティー又は無言で肯定する。

「中には、そうだな酒癖が悪いとか女遊び男遊びが過ぎるとか、そういう奴らだっているだろう。もしかしたら陰で悪魔の粉の売買、日影者とするむ奴だっているかもしれない」

タビキとクリスティー又はお互いに目を合わせないで焚き火を見つめる。

「そういうのと同じだよ。こういう身なりだからといって別に揉め事ばかり望んでいるわけじゃないってことだ」

つまりはそこに繋がった。

タビキは言わんとしていることは、光が差すところには影があり、影は光がなければ出来ないということだ。

「……すみませんでした」

クリスティー又は自分を恥じるように謝った。

「いいさ。別に俺が善人だって言ってるわけじゃないからな。……そうだな。無事に町まで着いたら、あんたを助ける時に折れたこの剣の代わりを見繕ってくればそれでいいさ」

タビキがそう言うと、クリスティー又は小さく笑い「はい」と少しだけ明るく答えた。

「さあもう寝た方がいい。明日は今日以上に歩くからな」

「はい。お休みなさいタビキさん」

「ああ、おやすみクリス」

そうお互いに言葉を交わして、クリスティー又は深い眠りに、タビキは浅く眠った。

次の日の朝は早かった。

まだ日が朧にしか見え、寒さが残る早朝に二人は出発した。道中クリスティー又は昨日の疲れをちらほらと見せるように立ち止まったりしたが、昨日とは違って少し打ち解けた二人は他愛もない話で旅路を盛り上げた。

日が高くなり二人の頭上まで昇った頃に、視界の端に町の影が見えるようになった。

それからクリスティー又はそれまでが嘘のように足が動くようになり、日が傾き始めた頃には町の入口まで足を運んでいた。

町に入るための門の前は、兵士が町に入る者に対し一人ひとり丁寧に調べていた。

タビキはどの町もいちいち一人ひとり町に入る者を調べることはないことを知っていたので、違和感を感じつつも順番を待つ人の列に大人しく入った。

クリスティー又はそわそわとしていたが、彼女も淑女としての自覚が何も言わずに順番を待った。

「次の者ここへ！」

面倒なことを命令されたと言わんばかりに不機嫌になっている兵士に呼ばれ、タビキとクリスティー又は進んだ。

「名前と目的を書いてここに……………ん？」

説明をしていた兵士がふとクリスティー又の方を見た。

「おい。この女まさか」

「ああ、もしかしたら」

兵士二人は顔を合わせてブツブツと呟く。

そして一人がクリスティーヌの前に立った。

「女。名前はなんて言う」

兵士の威圧的な態度に物怖じしたがクリスティーヌは答える。

「クリスティーヌ」バラユ、バラユ家の娘です」

その答えを聞いて兵士たちは懸想を変えた。

「お、おい。当たりだ！ はやく知らせてこい！」

「ああ、わかった！」

当人を置き去りにして兵士の一人は物凄い勢いで駆けて行った。

「え、ええと……」

「先ほどは大変失礼いたしました。今迎えの方がいらっしやると思われそうですしばらくお待ちください」

戸惑うクリスティーヌに兵士は深々と頭を下げた。

そしてしばらくして町の通りを馬車が転がるように駆けてきた。

「お嬢様！ ああ、お嬢様よく御無事で！」

「爺！」

馬車の御者は爺と呼ばれ、馬車を止めるとすぐにそこから降りてクリスティーヌの手を包むように握った。

「ああ御無事で本当によかった」

「ごめんなさい。心配かけたわね」

「いえ！いえ！ お嬢様が御無事だというだけで爺は安心いたしました！」

まるで血の繋がった孫娘の安否を確認したかのような喜びようであつた。

「ささお嬢様。お屋敷に帰りましょう」

そう言つて爺はクリスティーヌを馬車に乗せようとする。

「あ、待つて爺。この方も一緒に送らせて」

「はい。ん？……………この者は？」

爺はタビキを見るや否や露骨に顔をしかめて言葉を発する。

「爺。この方は私の命の恩人です。丁重にお持て成しなさい」

「お嬢様かし……………」

「爺！」

「は、はい。畏まりました」

爺は気が進まないといった感じだったが、クリスティーヌに言われて渋々馬車の扉を開いた。

そして馬車は二人を載せて走り出した。

「ごめんなさいタビキさん。家の者が失礼をして」

「ああ、いやこういうのは慣れているからいいが、俺があんたの家行っても本当に良いのか？」

「ええ。最高のお持て成しをさせていただきます！」

クリスティーヌは旅の疲れを忘れてしまったのか、生気溢れんばかりにそう答えた。

馬車はほどなくして大きな屋敷の前に止まった。

そして爺が馬車の扉を開けクリスティーヌが降りるや否や彼女の両親である二人が彼女を抱きしめた。

「ああ、クリス！ 無事でよかったわ」

「母様……」

「大丈夫かいクリス？ 怪我はないかい？」

「大丈夫です父様。ご心配かけてごめんなさい」

「いいんだいいんだ。クリスさえ無事で帰って来てくれれば」

親子は再会を喜び抱きしめ会った。

「さあ、疲れただろう早く家に入ってお休み」

父親がそう促すとクリスティーヌはそれを制した。

「待つて父様」

そう言ってクリスティーヌはタビキの傍に寄って彼を紹介した。

「私の命の恩人のタビキさんと言うの。彼に温かいご飯とお風呂を用意してあげて」

クリスは嬉しそうに父親にそう言った。

しかし、父親の方はタビキを一目見て、その顔を明らかに侮蔑の表情に変えた。

「……爺」

「はい旦那様」

そう言つて爺は数枚の金貨を握り拳程度の革袋入れてクリスティーヌの父親に渡した。

「タビキと言つたか、受け取りたまえ」

そう言つてクリスティーヌの父親はその袋をタビキの足もとに投げ落とした。

「娘のことは感謝しよう。だが君を家にあげるわけにはいかない。早々に立ち去つてくれないか」

「父様！」

その様子を見て激怒したのはクリスティーヌであつた。

「なんてことするの！？ この人は私の命の恩人なのよ！」

クリスティーヌは父親の行動に怒りを露にしたが、父親の方は冷たい目でタビキを捉えていた。

タビキは黙つて足もとの袋を拾い上げて、すぐに踵をかえした。

「待って！」

そう言つてクリスティー又はタビキの腕を掴む。

「クリス離れなさい！」

その様子を見て声を上げたのは今度は父親の方であつた。

「酷いわ父様！ 彼がいなかったら私は今頃モンスターに辱めを受けて食べられていたのよ！ あんまりだわ！」

そう言つて強引にタビキの腕を引つ張るクリスティー又だが、タビキはその手をゆつくりと解いた。

「別に良い。報酬はちゃんと貰つたんだ氣にするな」

「よくないわ！ あなたは人として褒められることをしたのよ！ こんな扱いあんまりです！」

「言つただろう。こういう扱いには慣れていて。それにあんなたち家族の再会に水を差すほど野暮じゃない」

「ああなたのような人がこんな扱いに慣れる必要なんてないわ！」

そう言つてクリスティー又はまたタビキの腕を取ろうとするが、タビキはそれを軽くかわして一言言つた。

「あんたみたいな高貴な奴がそう思つてくれるだけで十分だ。ありがとう」

そう残してタビキは足早に屋敷を離れた。

彼の後ろからクリスティー又の声が聞こえたが振り返らなかつた。

「さて、とりあえずはこれの代わりを探しに行かないとな」

そう言つて、さきほど貰つた革袋を開いてみる。

中には金貨が16枚。剣を5本買つてもお釣りがくるほどの報酬としては十分すぎる枚数だった。

おおよそ下手に後で難癖をつけられない様に多めに入れたのだらう。

言いかえればこれ以上関わりたくないという現われだ。

タビキはそれを快にも不快にも思わずただ懷にしまい、武器屋のある町中に向けて足を進めたのであった。

もちもの1：安物の剣（後書き）

また細々と連載していると思いますのでよろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4014o/>

わらしべ冒険者様

2010年10月19日17時27分発行